

Rives-Stoppa + 両側 TAR(RS-TAR)法で修復し得た

巨大腹壁癒痕ヘルニアの 1 例

東北医科薬科大学病院消化器外科

佐藤好宏、辻仲眞康、三浦智也、北村 洋、澤田健太郎、桜井博仁、三田村篤、
高見一弘、近藤典子、山本久仁治、中野 徹、片寄 友、柴田 近

【症例】60歳台女性。S状結腸癌に対する開腹ハルトマン手術、続くハルトマンリバーサル術の既往あり。3年前より正中創に腹壁癒痕ヘルニアを認めたが手術希望なく経過観察。手術1ヶ月前、ストーマ閉鎖創にヘルニアを新たに認め、嵌頓のリスクを考慮し開腹 Rives-Stoppa (RS) 法による修復を行う方針とした。

【身体所見】臍部から恥骨上に3ヶ所のヘルニア門を認め、ストーマ閉鎖部を含むヘルニア門の大きさは13(横径)×18cm(縦径)であった。

【手術所見】腹部正中切開で開腹。癒着剥離後、左右の Retrorectus space の剥離を行い、両側の腹横筋切開(TAR)を行い後鞘縫合が可能となった。Retromuscular に25×25cmのメッシュを留置し修復を完了した。

【結語】複雑な巨大腹壁癒痕ヘルニアに対する開腹 RS-TAR 法は、安全に施行可能であり良い適応と考えられた。